

福島地域マリンビジョン計画書

1. 地域の概要

地 域 名	漁 港 名
福島地域（福島町）	第3種 福島漁港（多機能地域振興拠点漁港＝増養殖支援拠点・衛生管理流通拠点・都市漁村交流拠点） 第2種 吉岡漁港（衛生管理流通拠点漁港） 第1種 岩部漁港
地域の概要	

(1) 地勢

福島地域（＝福島町）は、函館の西方約 70km に位置し、面積 187.23km² の町である。町の北西部は山々が連なり、南東部は津軽海峡に面している。対馬暖流の影響を受けて、平均気温は 9.2℃（H12 年）と比較的温暖な地域である。

(2) 地域の成り立ち及び社会・経済状況

福島町の歴史は古く、和人が最初に道内に拠点を築いた先駆けの地でもある。その後、豊かな水産物等による本州との交易、イカの加工、青函トンネルの建設等で繁栄してきたが、近年は漁業生産額・水産加工品出荷額の減少に伴い、かつての勢いに鈍りがみられる。

また、福島町は「千代の山」「千代の富士」という二人の大相撲の横綱を輩出していることから横綱の里として全国的に知られている。そして、延長 53.85km と世界一長い青函トンネルや吉岡海底駅という近代日本に名を残す建造物だけでなく、江戸時代の歴史を今に伝える大千軒岳や雄大な景観を有する松前矢越道立自然公園などの自然資源にも恵まれている。福島から知内へと通じる国道 228 号線は松前藩主が通った殿様街道として知られ、街道沿いの千軒地区では「活性化協議会」を組織し、松前神楽や地産地消による積極的な振興に取り組んでいる。

現在、福島町の人口は 5,897 人、世帯数は 2,340 世帯である。65 歳以上の高齢者が総人口に占める割合は 31%を超え、最近 10 年間で約 10 ポイント増加している（平成 17 年）。

福島町の就業者人口は 3,100 人である。産業大分類別就業者の構成は、第 1 次産業が 14.5%、第 2 次産業が 47.8%、第 3 次産業が 37.7%となっている（平成 12 年）。

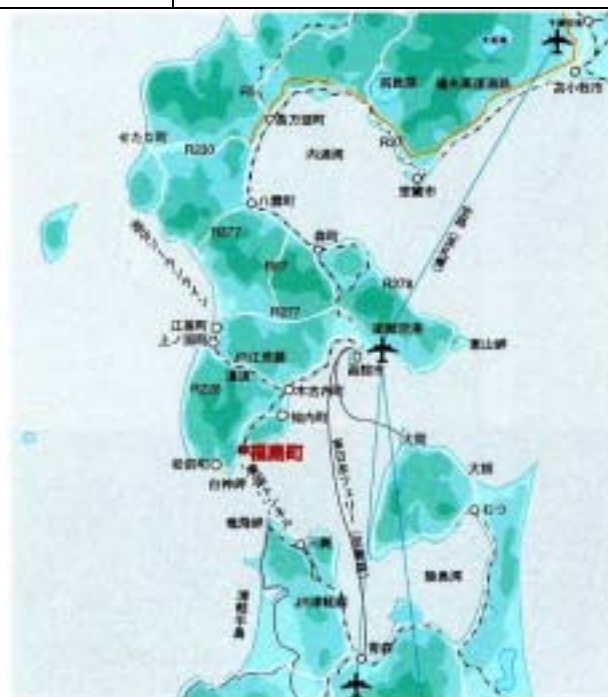
町内に 12 軒あるスルメ製造を中心とした水産加工業は、従業員数延べ 414 人、総生産額約 40 億円であり、町の主要産業となっている。スルメの生産量 2,433 トンは日本一である（平成 16 年）。

福島町の基幹漁業はコンブ養殖、イカ釣、マグロ延縄及びウニ漁業である。総生産量の約半数を占めるコンブ養殖では安定生産が行われているが、イカ釣やマグロ延縄は資源や市況により必ずしも安定とはいえない。また、ウニ漁業はコンブ養殖や延縄漁業者の貴重な副収入となっている。漁業就業者数は一貫した減少傾向がみられ、最近 10 年間で 28%減の 243 人となっており（平成 17 年）、総就業人口に占める割合は 1 割未満となっている。

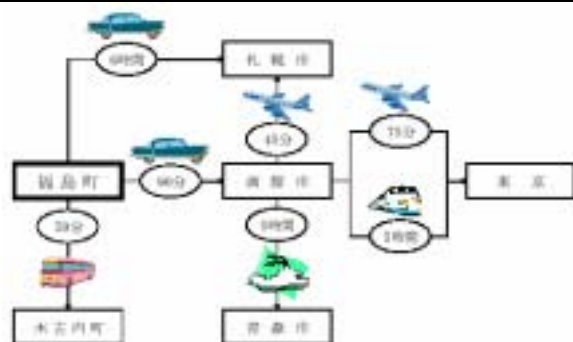
(3) 漁港の概要

第 3 種福島漁港（福島地区）は町の中心にあり、沿岸漁業はもとより津軽海峡西側～日本海のイカ釣り漁船にとっての陸揚げや補給のための重要な役割を果たしている。福島漁港の分港区である白符地区及び浦和地区並びに第 1 種岩部漁港は、沿岸漁業の基地としてコンブ養殖漁業やウニ・アワビ等の浅海漁業の漁船が利用している。一方、第 2 種吉岡漁港は福島吉岡漁協の本所が置かれ町内の水産物流通の中心的役割を担っている。

位置図



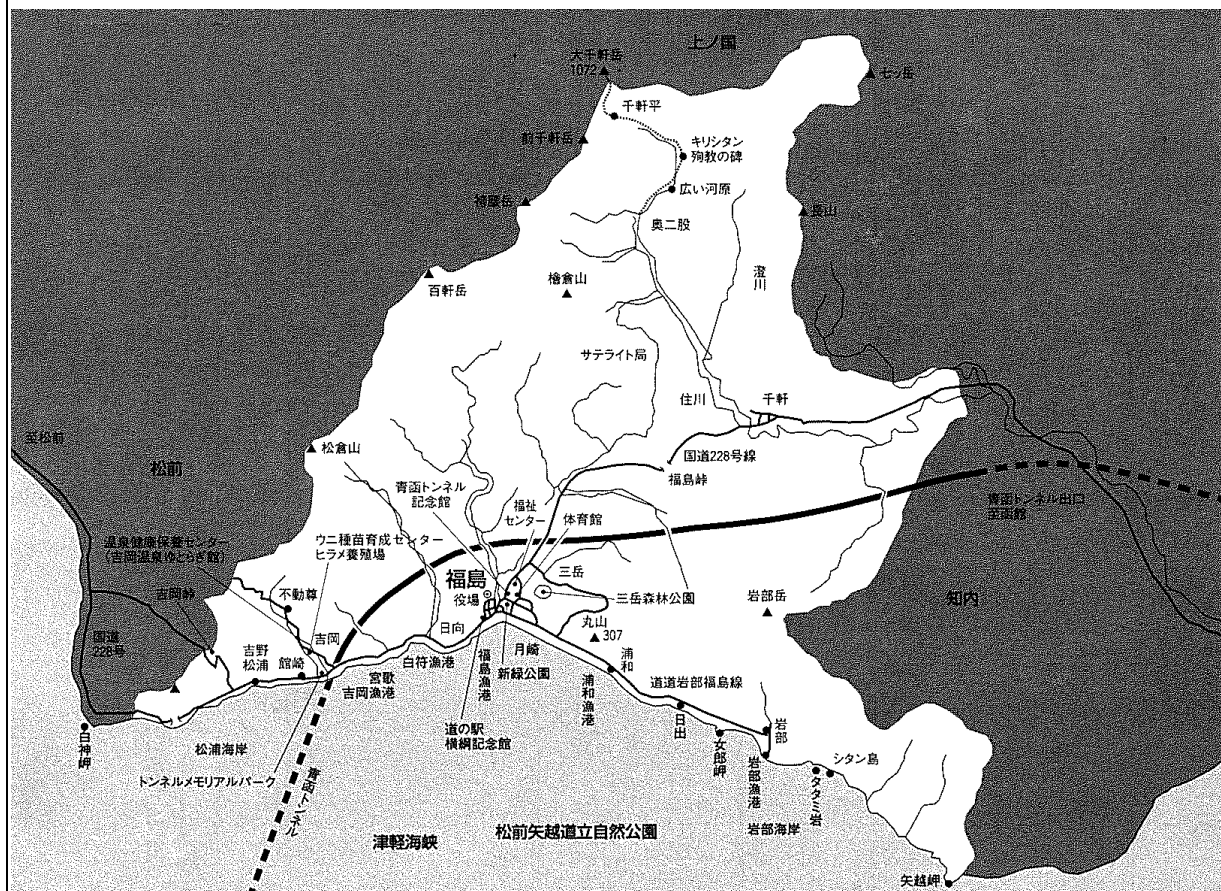
福島町の位置（北海道南部～青森北部）



福島町は北海道の南端に位置し、東は知内町、北は上ノ国町、西は松前町に接しており、南は津軽海峡を挟んで青森県を望む。

函館市へは 78km（約 90 分）、札幌市へは 308km（約 6 時間）、東京へは函館市から航空機を使うルートと木古内から JR（八戸～東京間は新幹線）を利用するルートがある。

福島港～三厩港間のフェリー航路は平成 17 年に廃止となっている。



福島町図



第 3 種 福島漁港（福島地区）



（浦和地区）



（白符地区）



第 2 種 吉岡漁港



第 1 種 岩部漁港

2. 地域の課題と目指す姿

地域の課題

(1) 漁業・養殖業の課題

1. 福島町の漁業生産量は、この 10 年間で約 3,000 トンの水準から約 2,000 トンの水準へと約 1/3 減少し、生産額も 2 割以上減少している。
2. 漁協組合員数は 243 人（平成 17 年）となっており、近年は年間約 10 人ペースで減少している。また、高齢者(65 歳以上)の割合が 57%となっている。
3. 基幹漁業のコンブ養殖漁業、イカ釣漁業及びマグロ延縄漁業のうち、特にイカ釣及びマグロ延縄漁業は資源の変動性が高く、漁家の安定的な経営を難しくしている。
4. コンブ養殖漁業は安定生産されているものの、現在のコンブ養殖の作業形態のままでは 1 漁家あたりの養殖規模の拡大は不可能である。このため、高齢化に伴う漁業者の減少対策として、作業の抜本的な効率化・省力化が不可欠である。
5. 同じ津軽海峡で水揚げされるマグロであるにもかかわらず、福島産マグロは大間町や函館市（戸井）のマグロに比べて知名度が低い。
6. ウニ漁業がコンブ養殖をはじめ各種漁業者の副収入となっているが、殻付出荷主体のため単価が安く、近年は価格の低下が経営に影響を及ぼしている。
7. 前浜には未だ利用されていない水産資源や付加価値化の可能性のある魚種が存在し、有効活用を図る必要がある。
8. 水産物の衛生管理については、漁業者の認識も徐々に高まりつつあるが、一体的な取り組みとはなっておらず、ソフト・ハードともに更なる対応が望まれる。

(2) 水産加工業の課題

1. 漁業と並んで地域の基幹産業となっている水産加工業のおかれた経営環境は厳しく、製造品出荷額は年々減少し、平成 16 年は 40 億円を割り込んだ。加工業者も平成 10 年まで 22 社以上あったが、平成 17 年現在 12 社となっている。
2. 前浜産のイカは高品質の加工原料となるにもかかわらず、通常生産しているスルメとは形状が若干異なる製品となるため、均一性の観点から利用は一部に限られている。
3. 前浜産のイカを原料に使用としても、数量（水揚げ量）が不安定で対応しづらい。
4. スルメ生産量日本一であるにもかかわらず「福島ブランド」は形成できていない。
5. 加工業でも更なる衛生管理体制の強化が必要である。

(3) 商工観光業の課題

1. 町のパンフレットには新鮮なウニ丼等の写真が掲載されてにもかかわらず、町内で提供できる体制が十分整っていない。
2. 水産加工業の低迷が地域経済に波及しており、商店街にとっても大きな打撃となっている。

(4) 地域全般の課題

1. 人口の減少が続いている。また、町民の 3 人に 1 人が 65 歳以上となっている。
2. 町財政が逼迫するなか、町民・事業者・行政（町）が協力し、自主自立による収支均衡に取り組んでいる。

3. 地域づくりに対して「積極的に意見を述べたい」という意見が多くある（H15 第4次総合計画 全世帯アンケート結果）にも関わらず、漁業、水産加工業及び商工観光業の間には地域の将来について話合う機会が少なく、連携した取り組みも限られたものにとどまっている。

(5) 漁港の利用上の課題

1. 福島漁港（福島地区）では、特に-5.0m 岸壁（旧フェリー埠頭）や-2.5m 物揚場のある新港区側の泊地で静穏性に課題があるほか、福島川河口部に位置する港口付近の土砂の堆積（航路障害）に対応する必要がある（現在整備を推進している）。また、今後衛生管理を推進する上では、一般車両の港内の頻繁な往来や潤内への**国道雨水等の流れ等への対策**を行っていく必要がある。さらに、福島港～三厩港間のフェリー航路は平成 17 年に廃止となったことから、-5.0m 岸壁を別の用途に有効利用することが必要である。
2. 福島漁港（白符地区）の屋根付船揚場は、安全性・作業性に優れており、他地区への展開が望まれる。
3. 福島漁港（浦和地区）では、現在も荒天時に越波がみられる。
4. 吉岡漁港には、漁協本所と産地市場機能が立地しているが、衛生的な水産物の取扱いを強化するための施設整備が必要である。
5. 岩部漁港では、利用漁船が減少しているが、背後集落の存続、漁場管理及び密漁監視機能などを考慮して、有効な漁港・漁村の振興策を打ち出していく必要がある。



福島漁港（福島地区）の泊地の状況

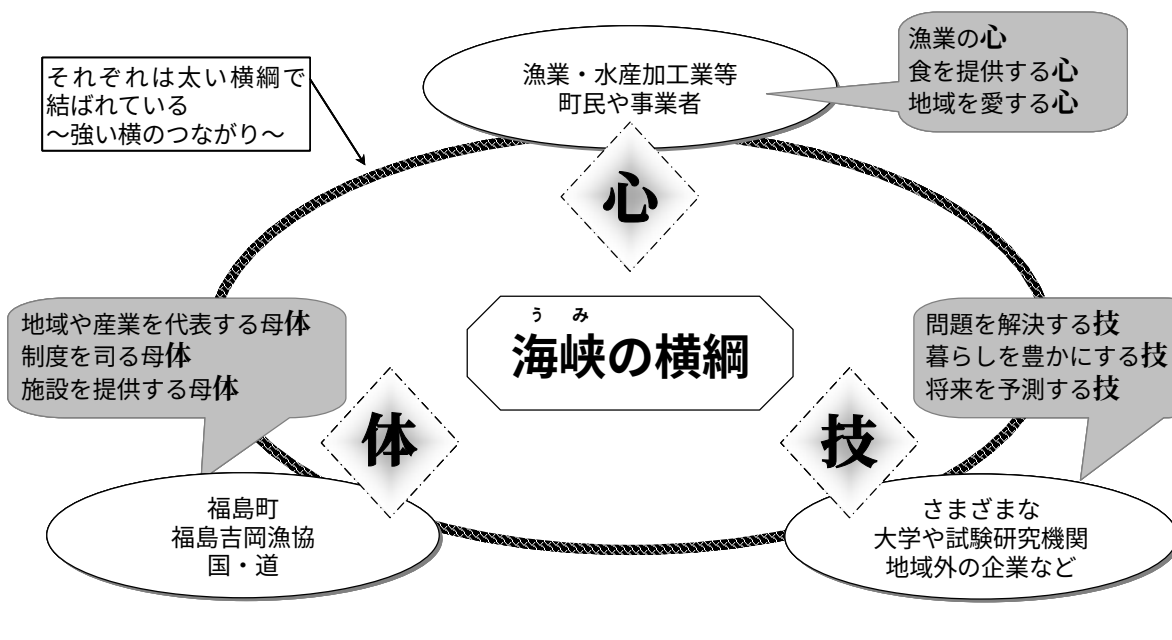
強風波浪注意報発令時の平成 19 年 2 月 14 日 9 時過ぎの状況（10 時 55 分に警報となる）

新しい福島地域マリンビジョンのテーマ

うみ 海峡の横綱をめざして ～ステップアップ福島～

脈々と流れる海峡（うみ）の恩恵にあずかり、先人から培われてきたコンブ養殖等のつくり育てる漁業とスルメづくり等の水産加工業を中心に、強くなり続ける地域を実現する。

このため、当地域が「北海道のフロンティアの地であった」という歴史的事実を受け継ぎ、先進技術や情報を有する大学等との連携を糧にあくなき挑戦とおしめない努力を続け、北海道の漁村の先駆けとなるような地域をめざす。



(1) 地域マリンビジョン策定（改定）の趣旨

これまで福島地域では、

「福島地区マリンビジョン 21 推進モデル構想 基本計画書」（平成 8 年 3 月）

「福島地域マリンビジョン計画書」（平成 17 年 3 月）

に基づき、地域マリンビジョンの推進を図ってきた。そして、これらの計画を進めるなかで漁港、漁場、漁村が整備され、漁業・漁村の生活の向上が図られてきたところである。

しかし、少子高齢化や国と地域の財政逼迫が喫緊の課題となるなか、地方分権や三位一体の改革などが進められ、まちづくりにおける「地域の自発的な取り組み」が重要視されている。

そこで、まちづくりの中心的役割を担っている福島町では、平成 18 年に「第 4 次福島町総合開発計画」と「福島町自立プラン」を策定し、自主自立のまちづくりに向けた一歩を踏み出したところである。

このような背景のもと、地域マリンビジョン計画についても今一度見直しを行い、高い目標を志しつつ、身の丈にあった着実な地域づくりを進めるための計画に改めたところである。

新しいテーマの設定では、この地域が北海道開拓の最初の拠点であったことを根底に、平成 16 年度ビジョンのテーマ『道南の秘境から日本の水産を支える地域を目指す』に込められた「前に進む地域」という想いを受け継ぐこととしている。

また、ビジョンの見直しに当たり、「世の中はどんどん進んでいる」「地域だけでは発展性に乏しい」「地元の豊かな資源を十分に活かしきれていない」という声が、漁業者・加工業者・女性グループなどからなる検討メンバーから多く聞かれたことから、積極的に地域外の方の情報や知恵、技術を導入し、地域の活性化に活かしていきたいと考えている。

さらに、水産のまちとして、当地域のシンボルでもある横綱を目指していきたい、という気持ちをテーマに込めるとともに、町民にわかりやすく親しみやすいテーマとすることにより、全町的な取り組みとしてマリンビジョンを推進していきたいとも考えているところである。

(2) 地域におけるマリンビジョン計画の位置づけと計画期間

この計画は、当地域の漁村づくりの全体的な考え方を示すとともに、各分野の具体的な目標を示し、下記の計画と連動するものである。

「水産基本計画」「北海道マリンビジョン 21」・・・ 国

「北海道水産業・漁村振興推進計画」・・・・・・・ 北海道

「第 4 次福島町総合開発計画」・・・・・・・ 福島町

(『福島町総合開発計画』は、「第 5 次全国総合開発計画」「第 6 期北海道総合開発計画」(国)、「第 3 次北海道長期総合計画」及び「第 4 次渡島広域市町村圏振興計画」(北海道)と連動するものとなっている。)

したがって、本計画の計画期間は、福島町総合開発計画と歩調を合わせ、平成 26 年度までとする。しかしながら、後段のフォローアップ計画の項に示すとおり、毎年度の地域のおかれた社会・経済・環境の状況及び取り組みの進捗状況を勘案し、PDCA サイクル(計画(Plan)-実行(Do)-チェック(Check)-改善(Action))に基づいて実施計画の見直しを行うこととする。

また、本計画は、下記に示す福島地域の主要機関等により構成される協議会(福島地域マリンビジョン推進協議会)において決議されたものであり、構成員である個々の機関の進める各種施策とも連動して推進されるものである。

福島地域マリンビジョン推進協議会に参加する地域の主要機関

福島吉岡漁業協同組合	福島町水産加工振興協議会	福島町商工会
福島町観光協会	千軒地区活性化協議会	福島町

(3) 目指す目標(アウトカム目標)

福島地域マリンビジョンが目指す将来目標として、計画期間最終年(平成 26 年)の福島地域の社会・経済指標を次のとおり設定した。設定の基となる資料や考え方は参考資料に付し

た。

福島地域の将来の目標

No	項 目	現 在		将来 (H26)	増加率
(1)	福島町の人口	5,897人	H17	5,500人	0.93
(2)	漁業者数	239人	H18	206人	0.86
(3)	漁業生産量	1,869t	H12～16の平均	1,849t	0.99
(4)	一人当たり生産量	7.82t／人	(3)÷(2)	8.98t／人	1.15
(5)	漁業生産額	1,364百万円	H12～16の平均	1,649百万円	1.21
(6)	一人当たり生産額	5,707千円／人	(5)÷(2)	8,005千円／人	1.40
(7)	水産加工業者	12社	H17	12社	1.00
(8)	水産加工場従業員	361人	H17	380人	1.05
(9)	製造品出荷額	40億円	H17	42億円	1.05
	観光客	7万8千人	H13～17の平均	8万9千人	1.13
	宿泊客	8千人	H13～17の平均	6千人	0.75

(4) 福島地域の目指す姿

目標の達成においては、福島地域は以下のような姿となっている。

◆ 環境・自然の恵みを豊かに享受しながら、未来へと継承する姿

- 環境の保全や改善と資源量に見合った適切な漁場利用の実践により、大切な自然や豊かな漁場が残されている。
- 主要漁獲魚種の安定した生産を維持しつつ、新たな魚種の創出が行われている。
- 未利用であった資源を有効に活用し、生産高の向上が図られている。
- 効率化と付加価値の創造により、回遊魚に左右されない生産基盤を築きあげている。

◆ 漁業と加工業とががっぷり四つに組み「足腰の強い水産業」をつくる姿

- 福島ブランドが確立され、地域の製品の価値が向上している。
- 育成・水揚・加工・出荷といった一連の流れについて、高品質の水産物を供給できる一定レベルの体制が整っている。
- 少子高齢化に伴う労働力不足を逆手に漁業と加工業が相互に補い、一人当たりの生産高が飛躍的に向上している。
- 高齢者や女性が安心して働くことができる環境が整っている。
- 事業者、町民らが互いに協力し合い、楽しく助け合える関係が築かれている。
- 水産業の営みは、後継者や新たな担い手へ受け継がれ、その文化や伝統が維持・継承されている。

◆ 新たなものや困難に挑戦し、自ら明日を切り拓く姿

- 技術や知識を持った大学等の研究者・技術者と積極的に交流し、地域の資源と地元の努力によって、新しい水産業の姿を見出し、体現している。

(5) 将来像（目標実現のための構想）

◆構想の全体像

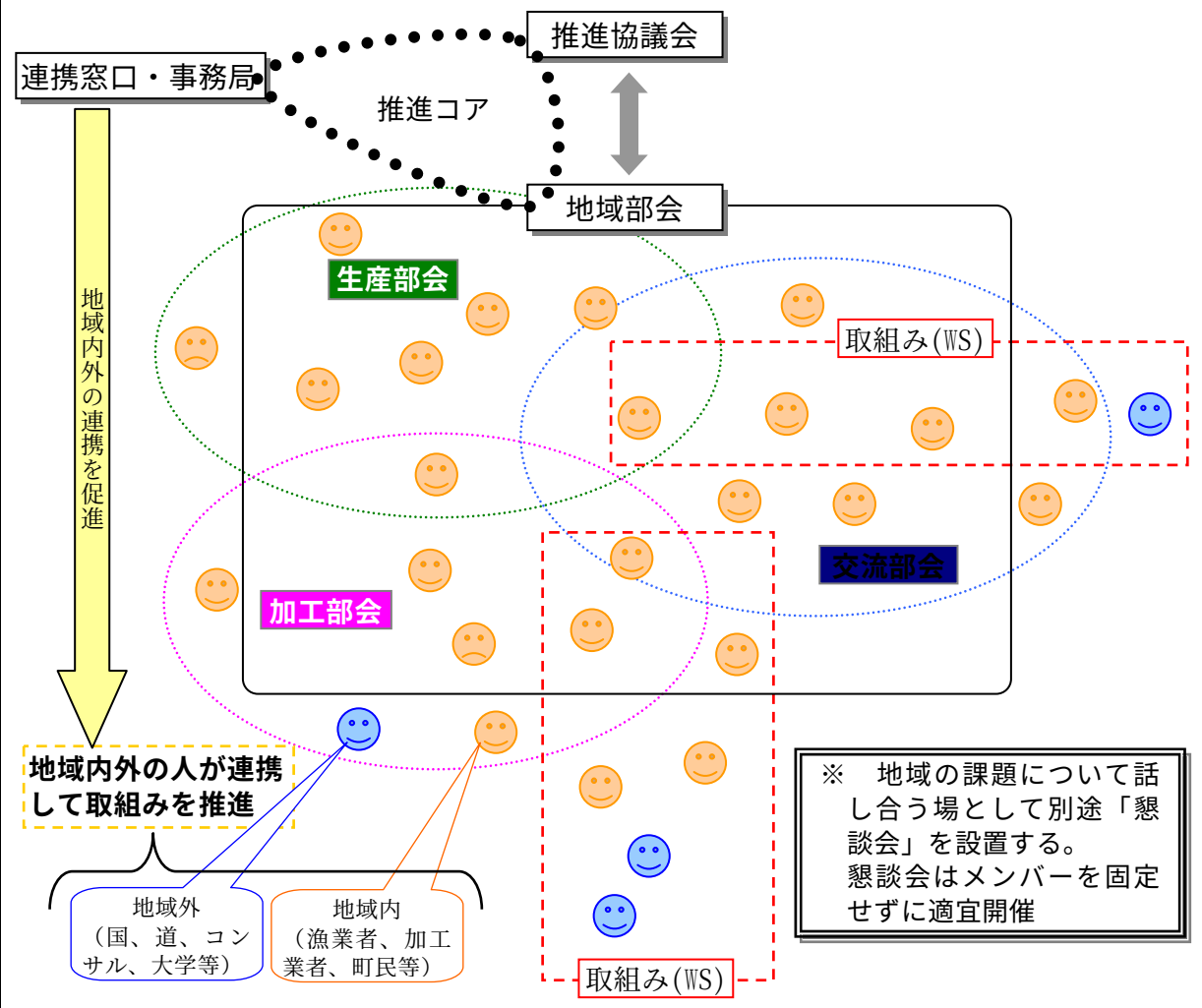
地域のポテンシャルを最大限に高めるための方策として、水産物生産の一連の流れを、水平分業体制から、垂直統合型にとらえ、できる限り地域が主導権を握るような体制を構築していく（次ページにイメージ図）。

具体的には、漁業（漁家）や加工業、流通業といったこれまでの業態の枠にとらわれることなく、必要な機能・役割については未経験の分野でも積極的に取り組んでいく。地域内にその機能・役割を担える人や事業者が居れば連携を模索し、居なければ地域外からの導入を図ったり、行政や研究機関からの支援を受けたりしながら自らの努力で克服していく。

このため「地域内での連携促進」と「大学等地域外との交流強化」を構想の中心に据える。

◆実現に向けた体制

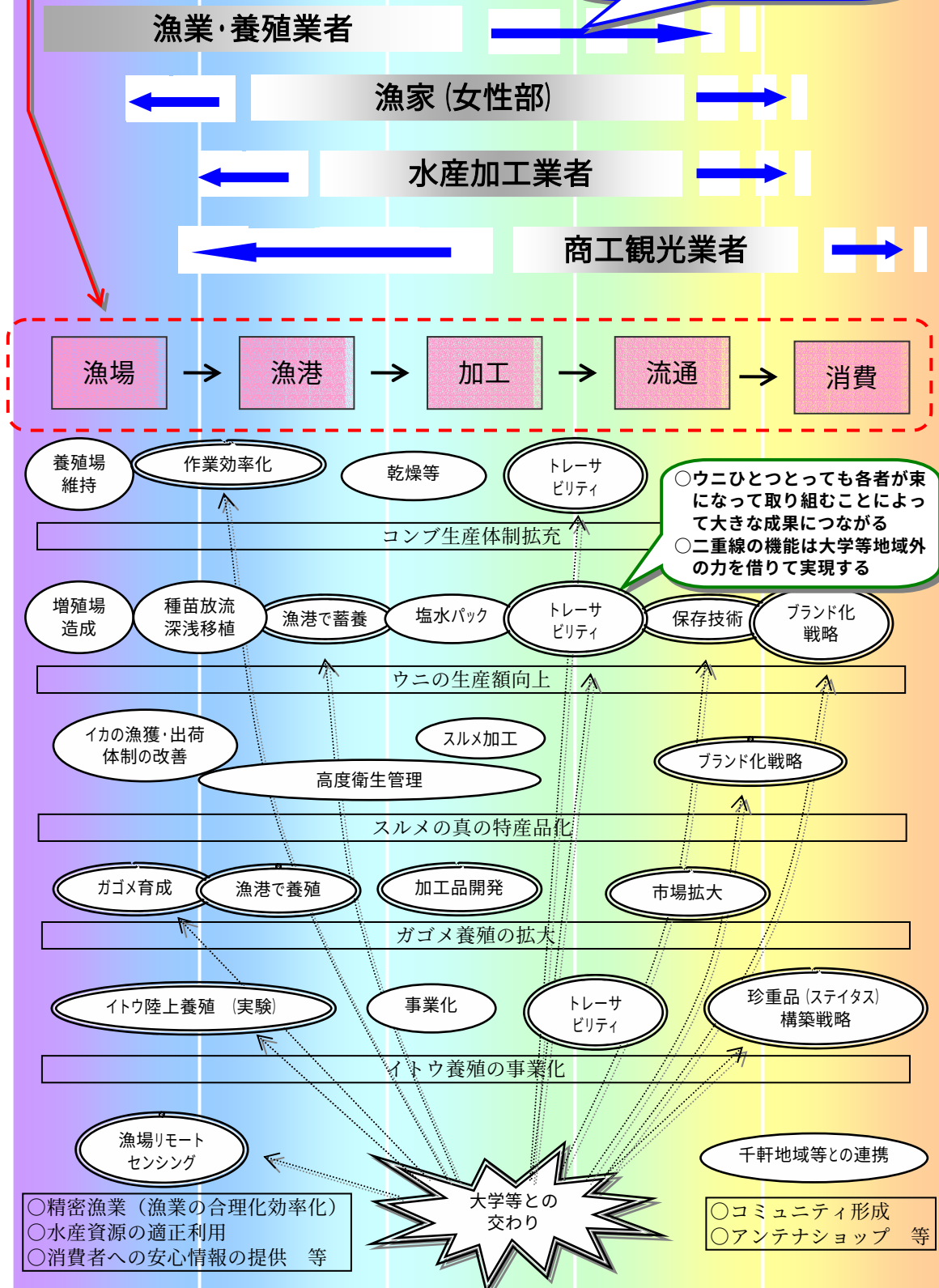
実現に向けた体制として、先に述べた最高決定機関としての推進協議会、その下に戦略的な推進方策を検討する地域部会（生産・加工・交流という三つの専門部会を内包）を組織する。そして、マリンビジョン全体の総括と地域内外の連携の橋渡し窓口を事務局が担う。



構想実現のための体制

- 水産物生産の一連の流れを、水平分業体制から、垂直統合型にとらえる
- できる限り地域が主導権を握るような体制を構築していく

- 積極的に幅を広げる
- 他産業の領分を侵すのではなく、オーバーラップする部分は、地域内で理解しあい連携・協力して共栄関係を築く



めざす姿を実現するための構想イメージ

◆構想の具体像

「目指す姿」を体現するための構想は、以下の7つの柱からなる。

—————《環境・自然の恵みを豊かに享受しながら、未来へと継承する姿》—————

1. つくり育てる漁業の推進

- 生息場や産卵場の保全・創造、漁場の環境保全を積極的に行うとともに、ウニ・アワビの人工種苗を放流するなど資源の維持・増大を図る。
- ガゴメやイトウなどを皮切りに新たな産品づくりに挑戦する。

2. 漁場環境保全・改善と循環型社会への対応

- 漁民による清掃活動や森づくり運動を継続・強化するとともに、生活や生産活動の場での環境負荷軽減に取り組む。
- 未利用コンブを商品化したりウニの餌料などに活用したりし、資源の有効活用を図る。

3. 資源管理型漁業の推進と沿岸利用秩序の確立

- 関係機関と連携して環境許容量について調査研究し、資源の適正利用を行う。
- 岩部漁港を中核とした密漁監視体制を築き、豊かな天然資源と環境の保護に取り組む。
- 漁場や漁港周辺の藻場造成を進めるとともに、既存施設の有効活用を図る。

—————《漁業と加工業とががっぷり四つに組み「足腰の強い水産業」をつくる姿》—————

4. 水産物の付加価値向上と供給体制

- 消費者のニーズに適應できる水産物の供給体制と商品開発を行い、多様な販売チャンネルを構築する。
- 町民の人脈やインターネットにより情報発信を行い、福島の水産物の積極的なPRとブランドの浸透を図る。
- 食の安全・安心を保障するため、高度衛生管理に向けた施設整備と体制づくりの充実を図るとともに、IT技術を利用した水産物の流通・販売の高度化を図る。

5. 漁業・水産業の経営基盤の強化

- 漁業活動の見直しを行い、先進的な技術や他分野で採用されている技術や地域内の他産業との分業を図るなどし、革新的な省力化と効率化に挑戦する。
- 高齢漁業者や女性に対応するため、漁業関連施設のユニバーサルデザイン化や就労環境の改善を行う。

—————《新たなものや困難に挑戦し、自ら明日を切り拓く姿》—————

6. 連携を糧にした地域での挑戦と努力

- 漁業者・加工業者・商工観光業者・その他の事業者及び地域住民との交流を深め、強固な地域コミュニティの形成を図る。
- 漁業就業者育成のため、着業に必要な知識・技術習得、施設取得のための支援を行う。
- 明日の福島地域を支える人材育成のため、地元の学校教育の中で、水産業や地域環境テーマにした学習を推進し、地元に着目した力強い風土形成に取り組む。
- 旧フェリー埠頭（-5.0m 岸壁）の積極的な活用により、漁港を地域産業振興、他地域の漁業活動拠点となるよう関係機関とともに検討し、有効利用を図る。

7. 大学等地域外との交流の促進

- 地域外の研究者や事業者と定期的な交流の場を設け、ネットワークづくりを推進する。
- 研究等のフィールドとして福島地域の積極的な活用を図る。

3. 構想実現に向けての取り組み

取組の内容

(1) 重点テーマ

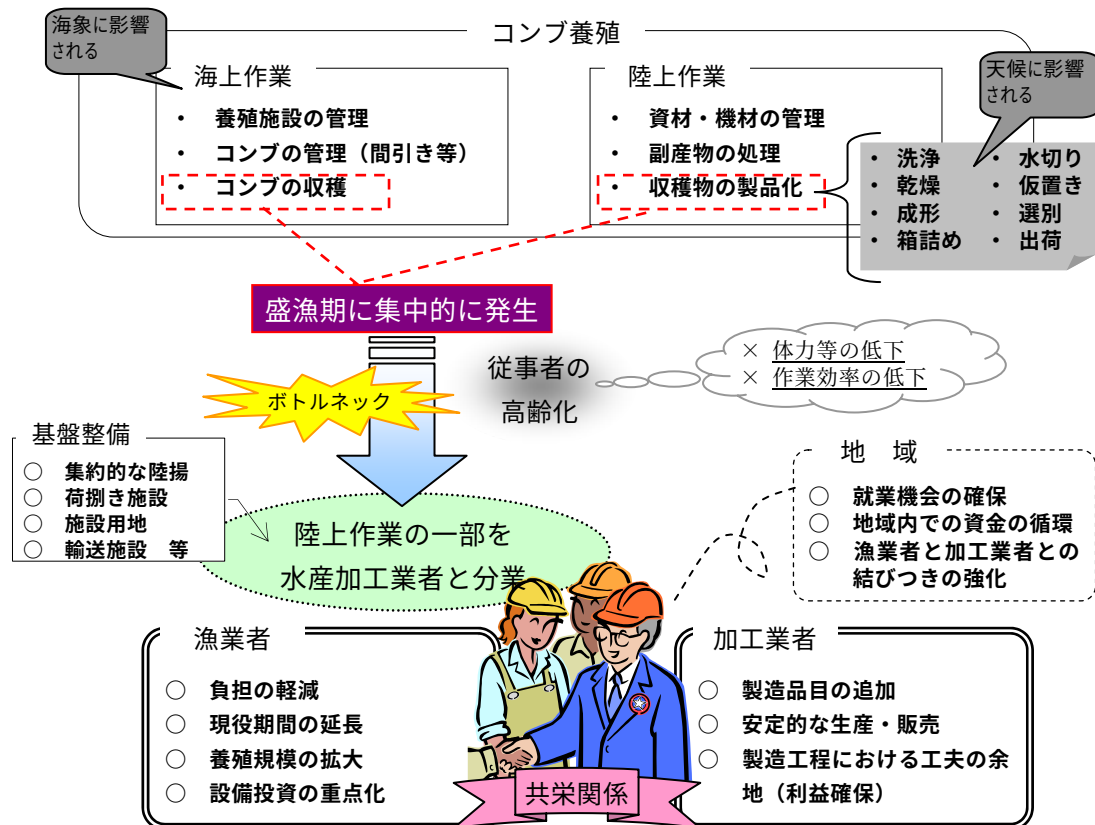
福島地域では事項に掲げる様々な取り組みを推進していくこととしているが、地域における課題の切迫度や地域に与える影響の大きさ、そして取り組みやすさなどを勘案し、特に優先的に進める取り組み（重点テーマ）を5つ抽出した。それぞれの取り組みの内容は次の通りである。

- ・ 「何歳になってもデキル！福島のコンブ養殖」の姿（生産部会の重点テーマ）

福島地域のコンブ養殖漁業者は、年々減少及び高齢化の傾向にあり、問題点として特に陸上での作業に大きな負担を挙げている。また、コンブ養殖では養殖過程で発生する間引きコンブの製品としての有効活用が大きな課題となっている。一方、水産加工場にはスルメ製造のための乾燥機があり、スルメの繁忙期以外は稼働率に余裕がある。

そこで、コンブ製品づくりをスルメづくりになぞらえ、海上作業を漁業者、陸揚げ後の製品づくりを水産加工業者がそれぞれ分業して行う。

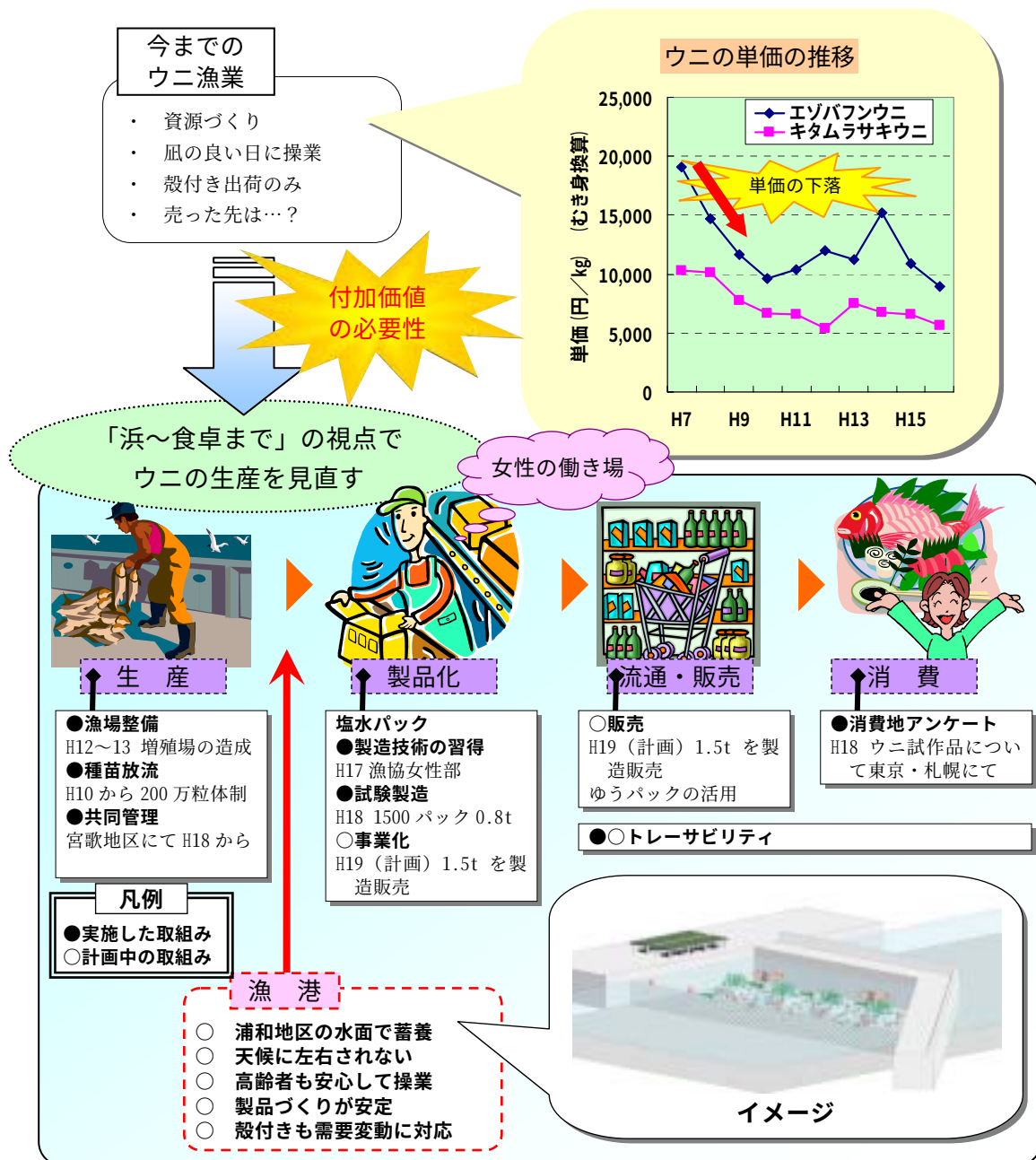
これによって、漁業者は海上作業に専念できることにより、養殖海面を拡大でき水揚げ量の増大が図られる。一方、水産加工業者は工場（施設、従業員）の稼働率を向上できるほか、製品の良し悪しに工夫を凝らすことができ、利益を生み出すことが期待できる。



「何歳になってもデキル！福島のコンブ養殖」の姿（コンブ作業の分業化のイメージ）

- ・ 「いつでもどうぞ！ウニなら福島へ」の姿（生産部会の重点テーマ）

福島地域では、バリバリの現役漁師から一線を退いた漁業者でも行える漁業としてウニ漁業がある。漁協では毎年 200 万粒の種苗を放流し、振興に力を入れてきたが、外国産ウニの大量輸入により、価格は低迷しウニ漁業による生産額は低迷してきている。現在、殻付きの出荷に頼っているウニに付加価値を与えることで、漁獲されるウニの単価の底支えを図るとともに、地域の雇用の場の創出が期待できる。また、漁業者が漁獲したものの価格の底支えができ、家族が加工に携わることができた場合には、漁家にとって二重の付加価値がつく。一方、町の観光パンフレットにはウニ丼の写真があるにもかかわらず、地元ではなかなか食べることができないのが現状。安定的なウニ丼の提供ができれば地域の魅力向上にも資する。



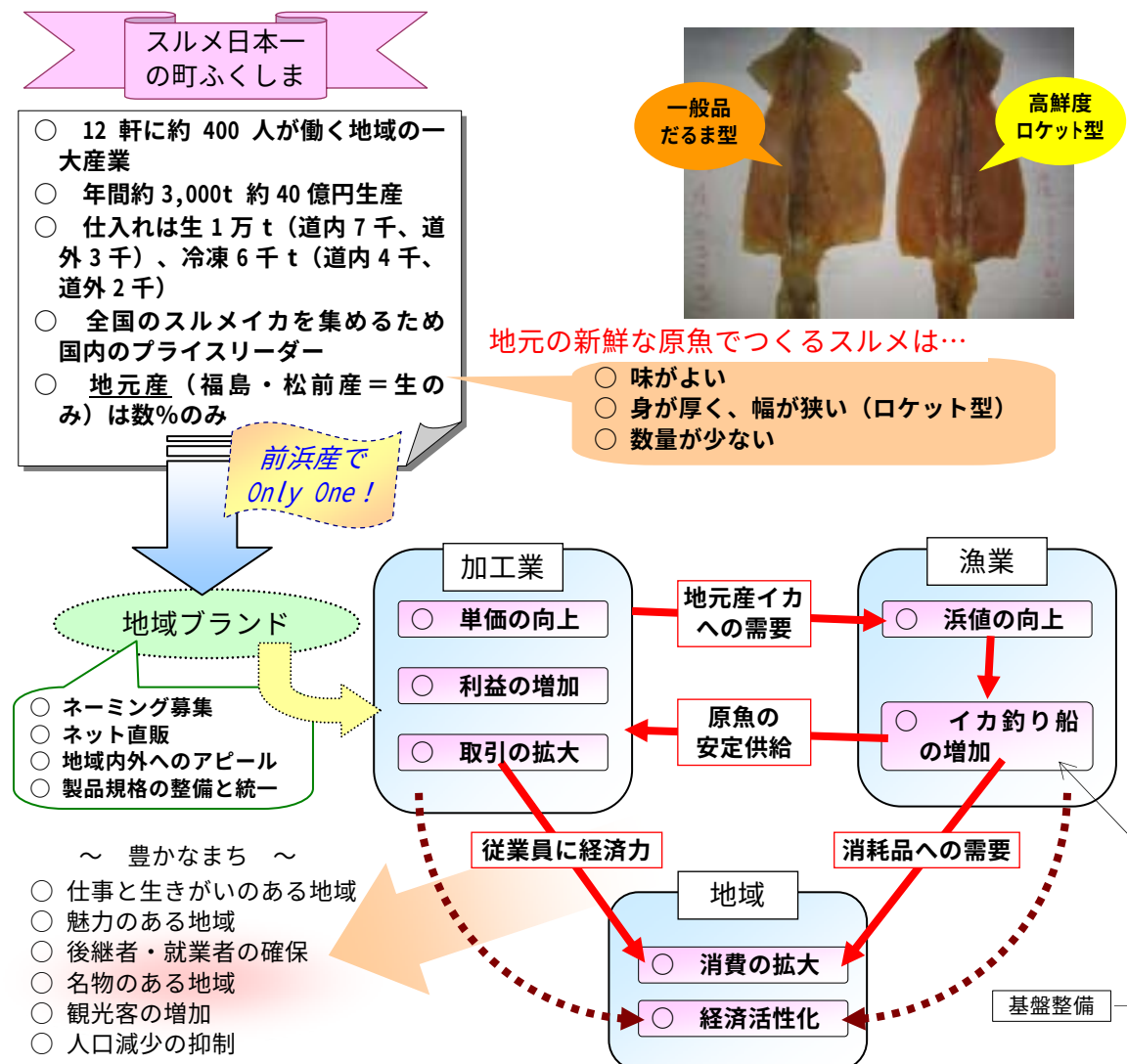
「いつでもどうぞ！ウニなら福島へ」の姿（ウニ付加価値化のイメージ）

・ 「やっぱり^{うま}イカ！福島産スルメ」の姿（加工部会の重点テーマ）

福島地域の水産加工業は、事業所数、製造品出荷額ともに減少の傾向にあり、問題点としてスルメに対する需要の減少、地域としての知名度の低さ、人件費や加工原魚といった経費の増加が挙げられている。一方、前浜で獲れたイカを原料としてスルメを製造すると、一般的なスルメと異なる色や形状となるが、味の良い製品ができる。

そこで、地元産のイカを原料としたスルメを核にして福島産スルメのブランド化を図るとともに、スルメの需要拡大と単価の維持・向上を目指す。

これによって、水産加工業者は経営の安定・向上が期待できる。また、漁業者にとっては新たな販路が確保できることにより魚価の底支えが期待できる。ブランド化や登録商標化などが実現すれば、周辺漁場で操業するイカ釣り漁船が福島地域の漁港を陸揚げ拠点として集中的に利用し、漁協や地域経済にとって好影響を及ぼさないとも限らない。



「やっぱり^{うま}イカ！福島産スルメ」の姿（スルメブランド化のイメージ）

- ・ 「浜も陸もみんな福島！元気なまちのススメ」の姿（交流部会の重点テーマ）

人口減少・高齢化が進行するなか、国・地域の財政も逼迫しており、住民や事業者が自ら知恵と力を出し合うことが、豊かな将来を実現するための必須要素となっている。また、福島地域では地域づくりに対して「積極的に意見を述べたい」という意見が多くあるにも関わらず、漁業、水産加工業及び商工観光業の間には地域の将来について話合う機会が少なかった。しかし、近年は千軒地区活性化協議会のように、自らの地域を積極的に良くして行こうという取り組みもみられつつある。

そこで、漁業、水産加工業、商業、観光業などがお互いの悩みや問題点、がんばろうとしていることなどを話し合える場を作るとともに、千軒地区や地域の様々な活動とも積極的に意見交換を行い、協働による共栄関係の構築を目指す。

これによって、一人ひとりや一事業者、一産業だけでは解決が困難であった課題の解決が可能となったり、切磋琢磨により他地域に対する比較優位性が築かれることが期待できる。さらには、地域内で情報やお金が還流することにより、地域の活性化が図られる。



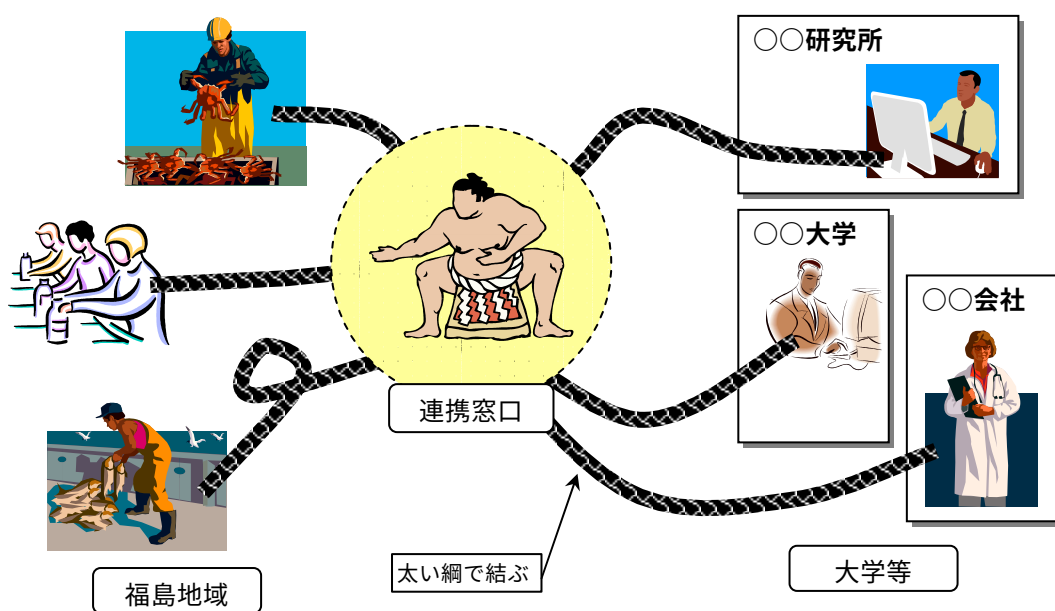
「浜も陸もみんな福島！元気なまちのススメ」の姿（地域交流のイメージ）

・ 「綱とり名人が繋ぐ！福島と明日の漁村」の姿（交流部会の重点テーマ）

福島地域には、豊かな海・森・川が存在し、資源的にも未利用なものが数多く残されている。しかし、地元の知恵や技術、労働力だけでは必ずしもこれらを十分に利用できているとは言い難い。

そこで、他地域の研究者や技術者、事業者と連携・交流をすることにより、地域の課題や問題点の解決が飛躍的に早くなるとともに、最先端の考え方や技術がいち早く福島地域に定着できる体制を目指す。

これによって、販路の拡大や単価の維持・向上、漁場環境・労働環境・生活環境の改善が期待される。



「綱とり名人が繋ぐ！福島と明日の漁村」の姿（大学等との連携のイメージ）

◆連携推進窓口の設置

<役割>

- ・ 地域内の取り組みと研究機関との橋渡し
- ・ 研究好適地としての福島を研究機関にアピール
- ・ 研究者の地域内での活動を円滑に行えるようサポート
- ・ 地域の人と研究者と一緒に話し・考え・発展しあえる企画の実施

(2) 取り組み計画一覧

地域で策定した取り組みの一覧は次の表のとおりである（★は重点テーマに関係）。なお、平成 19 年度の実施計画（目標）を参考資料に付した。

取り組み計画一覧

構想	取り組み	具体的内容	着手	実現	実施主体
1. つくり育てる漁業の推進	安全な種苗供給と計画的な養殖業の推進	ウニ、アワビの種苗生産・放流★	実施中		漁協
		ヒラメ、クロソイの種苗放流	実施中		漁協
		漁港を利用したウニの安定供給体制の確立（浦和）★	H19（調査）		漁協
		サケマスの種苗生産・放流	実施中		さけます増協
	新たな産品づくりへの挑戦	イトウ養殖の事業化	実施中	～H21	町
		ガゴメ養殖の事業化	実施中	～H19	漁協
2. 漁場環境保全・改善と循環型社会への対応	生産基盤の源である森～川～海の保全活動	漁業者による漁場や海浜の清掃活動の定期実施	実施中		漁協、小中学校
		豊かな海づくりのための森林育成・保全	実施中		森林組合、町議会、漁協、町、千軒地域活性化協議会
	水産系副産物の循環的利用	未利用コンブの商品化★	H19	～H26	漁協、水産加工振興協議会
		未利用コンブの餌料化（ウニの餌）★	H19	～H21	漁協
		イカゴロの有効活用	H22	～H26	水産加工振興協議会
3. 資源管理型漁業の推進と沿岸利用秩序の確立	水産資源の適正利用	漁場利用実態と適正利用条件把握のための調査研究	H19	～H26	漁協、北大、町
		ウニの深浅移植★	実施中		漁協
	密漁監視機能の強化と天然資源の保護	密漁監視体制の強化	実施中		漁協
	漁場生産力の強化	藻場の造成	H23	～H26	国、道、町、漁協
4. 水産物の付加価値向上と供給体制	多様な販売チャネルの構築	ウニ塩水パックの製造・販売★	H18 に試験	～H19	漁協
		朝市開催	実施中		朝市実行委員会
		蓄養施設を活用した直販所を整備	H20	～H26	漁協
	福島の水産物の積極的な PR とブランド化	地場産品の消費地での対面販売	実施中		漁協、水産加工振興協議会、地場産業開発研究会
		町内イベントでの PR	実施中		観光協会、漁協、水産加工振興協議会
		新たな水産加工品の開発★	H19	～H22	水産加工振興協議会
		福島産と称した商品づくりと販売★	実施中		水産加工振興協議会、地場産業開発研究会
	高度衛生管理に	漁港・市場の衛生管理施設の整備（蓄養施設から）	実施中		国、道、町、漁協

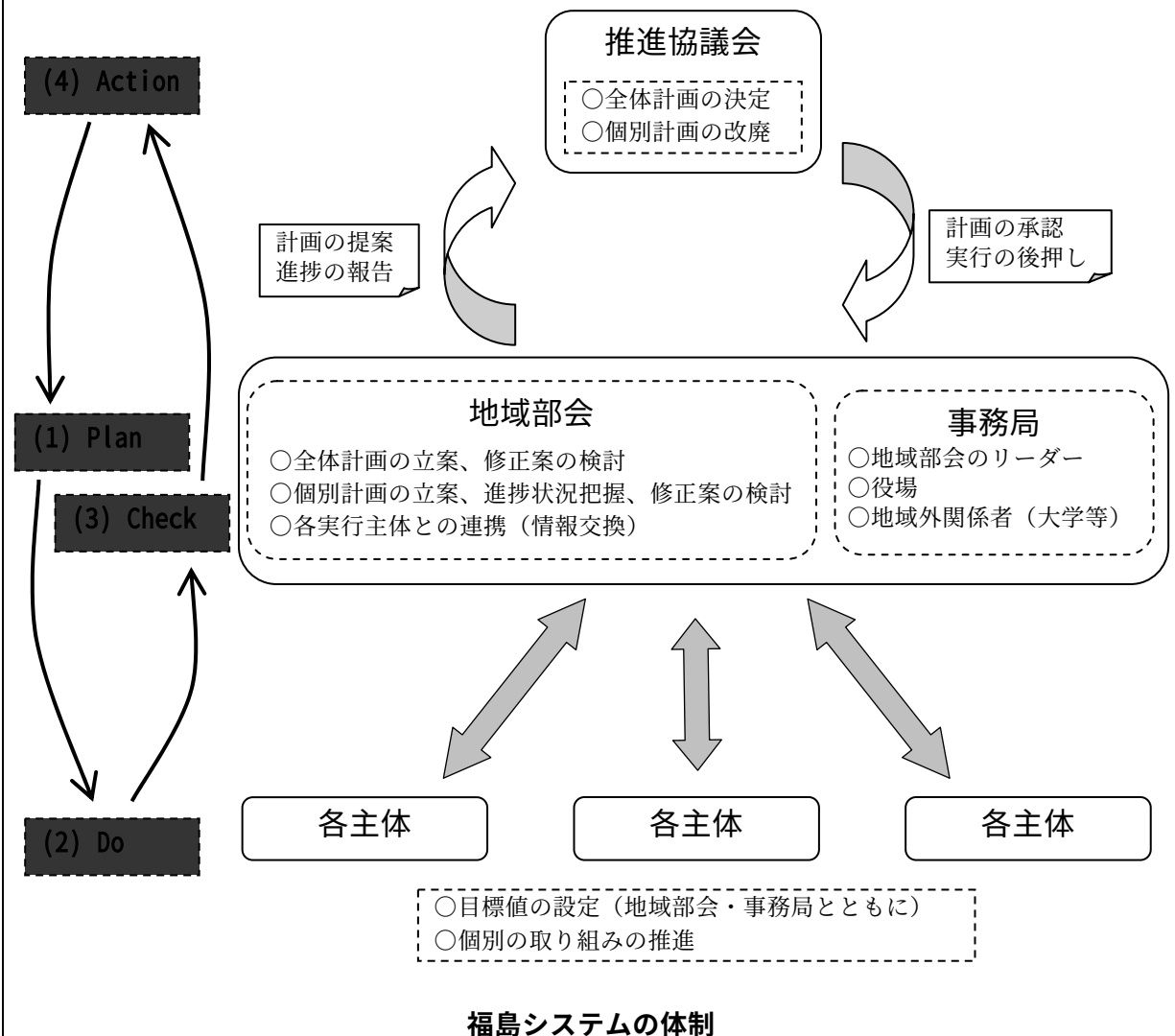
	と体制づくり	水産加工場の衛生管理体制の構築	実施中		水産加工振興協議会
	IT 技術を利用した水産物の流通販売の高度化	インターネットでの水産物の直販	実施中		町内企業
		インターネットでの加工品の直販★	実施中		水産加工振興協議会
		トレーサビリティシステムの構築★	実施中	～H26	漁協
5. 漁業・水産業の経営基盤の強化	漁業活動の省力化・効率化（高齢者、女性への対応を含む）	安全で快適な漁港施設の整備（低天端岸壁等）	実施中		国、道
		漁港施設の整備・改良による就労環境の改善	実施中		国、道
		作業工程の見直しと改善策の検討（コンブの分業等）★	実施中	～H26	漁協、水産加工振興協議会
		作業環境改善のための施設の導入（係留施設等）	実施中		国、道
6. 連携を糧にした挑戦と努力	他産業・地域住民との交流による強固な地域コミュニティの形成	漁業者との話し合い★	実施中		町民、町、漁業者、漁協、水産加工業者、水産加工振興協議会、商工会、観光協会、千軒地区活性化協議会
		漁業協同組合職員との話し合い★			
		水産加工業者との話し合い★			
		商工観光業者との話し合い★			
		千軒地域の取り組みとの連携★			
	漁業就業者の育成のための支援	漁業研修所入所者への補助	実施中		町
	風土の固持と人材育成	町内小学生による地引き網	実施中		教育委員会、小学校
		コンブ干し実習	H19	～H26	漁協、小学校
		漁協への社会科見学	実施中		漁協、小中学校、高校
	漁港施設の活用による地域産業の振興	新幹線工事への寄与	実施中	～H19	国、道、鉄道運輸機構、町
		材木の搬出	実施中	～H19	渡島西部地域の森林組合、国、道、町
	地域地域の漁業活動の支援	いるか突棒漁業の陸揚げ港指定	実施中	～H26	漁協、道、関係団体、町
7. 大学等地域外との交流の促進	大学等との交流の推進	交流推進窓口の設置★	H19	～H19	町
		研究者等との交流会の実施★	実施中		町、大学、漁協
		調査研究フィールドの提供★	実施中		町、漁協、水産加工振興協議会
		都市漁村交流の推進★	H22	～H26	道、町、観光協会

4. フォローアップ計画

フォローアップ

下記の福島地域マリンビジョン推進システム（福島システム）を構築し、PDCA サイクルにより、ビジョン実現に向けて各種取り組みを推進していく。推進協議会は毎年1回以上開催する。毎年の協議会では、計画に盛り込まれる個々の取り組みについて具体的な目標を基に、進捗状況を把握するとともに、次年度計画の修正を行う。

推進協議会の規約及び各会の構成員名簿、平成18年度の検討概要及び平成19年度の実施計画（具体的に明文化された目標）を参考資料に付した。



★計画期間の中間年（平成21年度）を目処に、マリンビジョン計画全体（目指す目標、目指す姿、将来像（目標実現のための構想））についても見直しを行う。

5. その他参考資料

参 考 資 料

資料 1 重点テーマについて（各テーマの年次計画及び平成 19 年度の目標）

- ・ 「何歳になってもデキル！福島のコンプ養殖」の姿
- ・ 「いつでもどうぞ！ウニなら福島へ」の姿
- ・ 「やっぱり旨イカ！福島産スルメ」の姿
- ・ 「浜も陸もみんな福島！元気なまちのススメ」の姿
- ・ 「綱とり名人が繋ぐ！福島と明日の漁村」の姿

資料 2 計画に基づく取り組みについて

- ・ 平成 19 年度の実施計画（目標）（取り組み一覧）

資料 3 大学等との連携について

- (1) 福島町と大学等との協力関係の系譜
- (2) 福島町 ”Town Sales ”（福島町からのお知らせ）
- (3) 「大学生による～浜を豊かにする調査研究～発表会」の記録

資料 4 計画における目標値設定について

- (1) 目標値の設定に関する資料
- (2) 「地域のめざす目標値」の設定に関する参考資料

資料 5 平成 18 年度のマリンビジョン計画改定に向けた検討状況について

- ・ マリンビジョン計画改定に向けた検討状況（日程一覧）
- ・ 福島地域マリンビジョン推進協議会 状況報告
- ・ 福島地域マリンビジョン推進協議会 規約
- ・ 福島地域マリンビジョン推進協議会員名簿・地域部会員名簿

資料 6 地域での取組みの状況

- (1) 福島地域マリンビジョン計画の進捗状況（H16 年度策定計画に基づく取り組み）
- (2) 取り組み状況の写真

資料 7 その他参考資料

- 千軒地域の取り組み関連資料
 - ・ 福島町千軒地域活性化実行委員会会則
 - ・ 千軒地域活性化構想